

童話を幼兒に話す準備的過程

小 野 直

童話をよくか聞せるのには、幼稚園は仲々骨が折れるといふ事を、一般の童話を實演する人も老大家すらもいつてゐるのを今迄に聞いてゐます。

そして、若し園兒に童話をあかせずに聞きかせる事が出来たならば、此の人の技倆は相當なものであるといひ得るとも、その人々はいつてゐました。それほどに幼稚園でも話をする事が困難だとされてゐます。あまり花々しくもなく、骨折でもありませんために、幼稚園向の童話の良書も實に僅少なものであります。それで、毎日、幼稚園で、談話の時間を擔當してゐる方々がする骨折は嘸かしたと考へられます。老大家が幼稚園でも話をす

ることがむづかしいといつたのには色々な條件があると思ひます。即ち、物語としての資格を保つて、而も大人がよろこびさうな迄の筋のある、整つた一つの童話を、割合に長い時間の間、しづかに聞きかせやうとした時の苦勞のある事をいつたのでせう。さうでないにしても幼稚園の話はたやすくはありません。十分間と注意がまとまらない幼兒には、それ以上の話ではよほどうまく話しか、よほど變化のある話でないと失敗に終ることがよくあります。事實、私共が話をして二十分から三十分の長い時間を要する時には、間斷なしに、園兒の注意の散らないやうにと氣を配りま

す。そのやうな無駄な方に骨を折つてつくづく話の材料の撰擇の粗漏であつた事に氣がつくことがよくあります。

子供は、元來お話が好きなのです。面白ければ幾らでも聞きます。疲れて一時は騒いで居ても、又、氣分が回復すると靜かに聞きはじめます。子供は、他人にお構ひなしに休憩時間を自分でとるので、そればかりでなく隣近所をすつかりその状態にします、それかといつて又氣が向いて來ると自分一人でもお話に聞き入つて先から先をもとめる程の熱心があります。

此の園兒たちがあきの來ない時間内で面白く、心持よくお話を聞かせる事を、是非とも考へて見なければなりません。



先づ、ここに何冊かの童話集があつて、園兒に話して聞かせる材料を選定する爲に、あれこれと

讀みあさつて、一つの氣に入つた話を見出したとします。この話を園兒に聞かせる迄に、如何なる準備的の過程をとつて行くべきかといふことについで考へたいと思ひます。

「一」 通讀中の感じと一讀後の感じ

童話をよみはじめから、一通り讀んで終ふまでの間に、私共は、様々な感じを起します。例へば、此筋は或る童話に似てゐるとか、此のさまは斯うなるだらうとか、このあたりはよい感じだとか、此處らは子供に理解が難しからうとか、此表現が拙いとか、冗漫だとか、大人が讀むのだつたら面白い話だとか、是非とも子供に話して聞かせたいとか、この一段は實に面白かつた息もつかせぬまでの巧な表現だとか、まだあるでせうが、その様な感じを起し乍ら通讀をします。その話を一通り讀んだ後に、全體から見ての感じを起します、それが、前に列挙しましたやうな感じを

依然持續する事がありますし、又、異つた感じを起す事もあります。例へば、面白い乍らも全體から見て、その面白さが、さまで生きて來ない様な感じもあります。

今、私は、讀後の感として、「園兒に話してやりたい」と思つたその話を如何に吟味すべきかを見るのです。

〔二〕 其の筋の回想

單に自分自身が好きだからといふ理由で話を園兒にして聞かせやうといふ事は、少し無理があります。自分が充分に園兒の心を思ひめぐらして、極端にいへば、自分の心のある部分を園兒になし果てて、そのところから自分が好きだと感じた話をするのならば、自分が好きだからするといつてもよい。が、自分は大人であり、聞かせやうとする對手は、自分とは親子程の隔りがあり、生活の天地、思想の状態雲泥の違ひがあるのですから、

園兒の心を以つて自分の心とするのでなければ、選んだ話が失敗を生む事は多いと思ひます。園兒に適する中心生命をもつた話に對しては、まづ面白いと感じる所、大事だと思はれるところとに、意を注いで、今一度、その話の筋が確かに面白いかと檢べて見なければなりません、この時に、だん／＼と、園兒に話して見やうといふ心持が薄らいで行く様であつたら、この話は、よほど改めなければ、私自身の話すべき話にはなりません。

園兒に聞かせるお話を一概にいへば、筋が單純で、無理がなかつて立派に達する、明るい氣分の話であることが大事な事であります。

〔三〕 分析と綜合。省略と改添。

次に、すべき事は、話の始めから、一句一句、靜かに丁寧な、吟味して行く事です。この言葉はお爺さんがお婆さんに。これはお婆さんがひとりづいてゐる事。これは作者が事件を見ての表

現。これはお爺さんのいふべきところを作者がいつてゐる。といふ風に一つ一つ落ちなく考へて、其の間に面白いと思つたところ、中心だと思つたところを細々と分析して情景を考へて見、私の考へて組立てた時にも面白さが前の様に出るか、中心が分析する前と同じ様に感じられるかを吟味して見ることであります。又、此話に話の山と話の谷がいくつあるか見る事でもあります。この骨折をしなければ人の作つた話が私の自由に扱ひ得るお話にはならないのです。それでかやうにする事で、私共がその作者の心に近づいて行く事が出来るのです。近づいて行くといふ事は、そのお話を

原作の氣分を傷けずに話せるやうになつて行くといふ事です。原作の味を破壊しないやうにするといふ心掛は、お話をする人が作品に對して、敬虔な態度である事を表はすのであります。

幼兒にその話が適するか否かを察知する一方法

として私共は子供等がお話をきいてゐる時の顔や姿を想像するのが何より便利です。子供等にこの話を聞かせたらどんな顔をするだらうか。どのあたりで飽きるであらうかと想像して見ることで

話が複雑だつたなら、簡單にするために、ある部分を取り除いたり、幾つかある話の山を割愛したりするのは、教育者として、又、實演者として幼兒のために當然すべき手加減であります。換言しますと、最後まで大きな力を持つてゐる、筋の取捨鹽梅がここでされるのであります。

〔四〕 讀むために書いた話を、話すた

めの話に改造する勞作。

用語のむづかしいものを、子供の理解する語に改める事。私共が子供に聞かせる話を選定するために、童話集を讀む時に、既に、その幼兒に難澁な語句は、翻譯をして行くのであります。ここ

で更らに明瞭に調べて見るべきです。それから、地名にも、固有名詞にも、時代にも、園兒はあまり執着をもつてゐませんし、大して有効なものはありません。却つて話す方に邪魔になる事がありません故に、その扱ひに困る時は、思ひきつて、ある時、ある所の、あるお百姓（おぢさん）に改めた方がよいと思ひます。場面の交錯してゐるものも簡単にしなければなりません。さて、讀む爲に書いた話を話される様に組立てた話に變る手段を述べなければなりません。話す話と讀む話との違ひをざつと申し上げたいのです。ここに話として表現したい事件を創造したとします。その叙述順序も略定つたとします。そこで其の事件を一人は文字であらはずとします。そして古今、東西の如何なる寶物や、怪物でも、如何なる事件でも、もつて來て事件をあらはします。高い聲、低い聲、太い聲、細い聲、聲の音色、言葉の遅速、

間（ポーズ）の開け方などで表現して行くとしよに、言葉の足りないところや、言葉であらはずないところを身振や、顔の表情であらはします。この二通りにあらはされた二つの話について考へて見ると、書いた方の話は、何時でも、思ふ時に讀むことが出来ます。望む時に繰返してその表現を味ふことが出来ます。話す話は、その話した時に聞かなかつたならあとで今一度その通りには繰返すことが出来ません。その瞬間／＼に消えて行きます。しかし、文字で書いたのを讀むより樂な上に、直觀的な實感を受ける事が出来ます。

書いた話は、同時に起つたことを、次々に書いて行つて、それで同時に起つた事柄の感じに起させなければなりません。遠近、廣がり、音の高い低い、實に筆一筋での表現では非常な骨折があります。しかも、充分とはまわりません。しかし、この話は、紙の上のこつてゐますので、命の長

い點でこれは永久であります。

これを、物にたとふれば、書いたお話は、繪にかいた庭であり、聞く見るお話は、木があり、水があり、魚の浮んでゐる池がめり、石がある庭園を目のあたり見る様であります。子供に分る點から申しますと、書いた話は讀む力がなければ話を理解する事は出来ません。今、これをそのまゝ讀んできかせるとすれば、幼兒は未熟な耳と少い經驗とをもとにして、たゞ、耳ばかりをたよりにして聞く事になりす。もし、話して聞かせるやうに出来た話ですと、目で見、耳で聞く兩つの助けを借りて、よりよく話を理解することが出来ることに氣分もわいて來るわけです。よむやうに書いた話を、私共が話すために、次の様な仕事をする必要があります。

(一)、話す時には身振に對する説明にあたること
ば(例、上を仰いで、あちらをむいて……)を省

くこと。これは書く話としては必要なのです。

(二)、音の性質や、擬聲であらはし得るところも身振聲にかへること(例へば、大きい聲でいひました。それはく小さい聲で……。あはてて鳴きました。震へた聲で……)

(三)、必要だと思ふ、間(ことばとことばとの間のへだたり)を充分加減すること。

(四)、「と、いひました。」「と、うたひました。」も出来る丈省いて、實在その本人がうたつて居ると考へることにします。

(五)、必要だと思ふ、繰返しを適當につけます。

(六)、面白いところを生かす爲に、そこが徹底する様にし、中心點は、注意深く耳と目から充分に話を徹底して理解させ、よく表現する様になります。

(七)、中心點や、面白いところで其の眞價を發揮させやうとするには、それを助けるやうな話の

筋を運ばせる叙述の部分はさらりとすゝめて行つて、無駄なことをいつて子供を疲らせない事です。はじめから、詳しく／＼表現しやうとしない事です。この失敗は、話す事に馴れて來た頃の人のよく陥ることなのです。

斯様に話す話に直すことの注意は、別に、譬へますと、三色版の繪をつくる時の様であります。赤色の版、青色の版、黄色の版をつくつて、だん／＼刷り重ねて行つて原色が出るのと同じ様です。書いた話から、身振りであらはせるもの、聲の高低、強弱、音色であらはせるもの。作者自身がいふところを登場人物にいはせられるところ、どれだけを又話す人がいふべきかと、別々に考へて、それをまとめて、話の全體の感じを思ひ廻らして見ます。

このあたりの過程の努力が一番大事な働きです。身振りは、自然に近い、大事な身振りだけに

して、いらぬ事ははぶいて、まづ上品に扱ふ事を忘れてはなりません。

五、回想

さて、一度、組立の出來た話をはじめから繰返して考へて見ます。そして、(一)原作の中心點が明らかに生きてゐるか如何か。(二)話が面白くなつたか如何か。(三)話としての體裁はどうか、子供が聞いてしまつて満足する結びになつてゐるかどうか。(四)お話が上品に藝術的に運ばれてゐるかどうか。(五)ことばがわかりやすくなつて、説言や、方言は注意して除いてゐるかどうか。

さうして、ここにも前々に述べました、分析や、綜合や、改添や、省略などが繰返されるのです。

六、實演、試演。

これまでに一段落がつかましたので、ここで、子供にでも、大人にでも、一度こころみに話して

見ることが必要であります。若し、私共が、自分

の考へてゐることを話して見ますと、自分の思つてゐることがまゝありますし、自分の話す方法が、目的と違つてゐたことなどがよく分ります。分つたら、それを改めるのです。かやうにして、おさ／＼怠りない準備をして園児（幼兒）の前に出るとしたなら、私共は、その努力の効果の如何を體驗したさにその時の來る事を待切れなく思ふでせう。

七、いよ／＼話す事。

いよ／＼、話して見て、その話の効果のあるなし、努力のしどころがよかつたかわるかつたかが分ります。話がこれまでになりましてからは話す話として大成させるのには、あまり幾多の過程はありません。若し、これだけの努力をして話す方があつたなら、漫然とよんで話し、又、只題目ばかり見て子供に讀んできかせてゐた頃に比して、その失敗は大半以上を減じ、又従前より數等よい

効果の話をする事と思ひます。

以上の事は、私自身が、今迄に通つて來た道、今でも辿つてゐることを反省して書とめたものです。同志の人への、助言として、若少の人に試みようといつてゐる事なのであります。これが御參考になれば幸いです。

最後に、一、二を申し添へて置きたい事は、幼兒にお話をする際手近に黒板がある時は、彘をかいて、その風景の大あらましてもが分る様に、手早く次々とかいて行くことです。これは非常に、理解をはやめ、印象を明瞭にし、感動を樂にさせ疲労も倦怠も少くする事が出來ます。これには形はまづくつても早い事が第一の條件であります。

今一つは、お話をする私共は、人格の陶冶を望み、藝術にしたしみ常に明るい軽い心と、こどもに近い見方を培養することにとめなければならぬ事であります。（終）—昭和五年七月二日—